

『朝読書のねらうものは』

毎朝10分間の朝読書に全校で取り組んでいる学校が多くなっているというデータを、先日目にした。朝読書は小・中学校や高等学校で、読書習慣をつけることを目的として始業時間前に時間を設けたものである。

学校は学習の基礎基本は「読む」と位置付け、読書活動を奨励している。その一環として読書習慣を身に付け、それを学習習慣に高めるために朝の読書活動に取り組んできたものだ。朝読書には4つの原則がある。「みんなでやる」「毎日やる」「好きな本でいい」「ただ読むだけ」というものの。

個々の学校や担任単位で40年ほど前から全国各地で行われてきたものであるが、24年前にある高校の先生お二人の提唱・活動をきっかけに全国に広まった。特に小学校で盛んである。

そもそもは学力向上をねらって始められたものだが、朝読書を「読書」「図書館教育」「国語科」とは切り離して考えてみたい。

まず一つは、自分で選んだ本を自分で読むということだ。先生や親が選んでくれた本を読むのではなくて、ある時は家にある本、ある時は図書館から借りた本等を持ち込むなど、自分で選んだ本を読むところによさを認めている。それは生徒指導、進路指導、人間教育に通ずることで「主体的な生き方」を育てるというところにつなげたい思いがあるからだ。

小学校3年生のNちゃんは、絵本が大好き少女。でも彼女が手にしていたのは絵本も絵本、絵がほとんどの本だった。図書館で本をぜんぜん借りないし、朝の読書の時間に読むのは絵がほとんどのNちゃんが、ある日突然、絵の入っていない字ばかりの本を読んでいる場面に出くわした。

そうしているうちに3学期の中ごろになって、字がほとんどの本を読み始め、ずっとそういう本を読むようになった。「好きな本でよい」がNちゃんを育てたということだ。

国語の力を付けることを目的として朝読書に取り組み、効果があがらないということで取りやめになった学校があると聞く。朝読書をするより、漢字練習、毎日十分間やった方がよっぽど効果があると考えたようだ。朝の読書を続けると確かに国語の力が付いてくるが副次的なことである。

心がすさんでいた5年生のK君が朝の読書に取り組めるようになった。小さいころ祖母に本を読んでもらっていて、本そのものは大好きだった。ただ、漢字が読めなくて、それもあって、朝読書の時間に廊下でわめいたり壁をたたいたりして妨害していた。ある日小さいころ祖母に読んでもらっていた絵本をどさっと持ってきた。K君に読み聞かせをしてやったところ、それをきっかけにして、朝の読書に参加するようになった。朝読書があったからこそ、その子の本とのかかわりが分かり、それを通して心を安定させることができたといえる。「朝読書」は、一人一人を大切にした教育の

一つの方法だということもできる。

もう一つ。本には、すばらしい教育力がある。どんな本にもある。教師も子どもも朝の読書の時間を通して本で学んでいるということ。教師も子どもも『共に学ぶ』時間が朝の読書の時間になっている。学校教育の中で、教師と子どもが『共に学ぶ』時間は朝の読書の時間だけ。何を学ぶのかはそれぞれ違っていい。それは、国語の力に関することだけではない。あくまでも国語の力は副次的なものとする。

カリキュラムの中に朝読書を取り入れている学校は、全国の7割を超えているそうだ。一番効果的なことは、落ち着いた雰囲気です。一日が始まること。すんなりと1時間目の学習につながる。私がいいた学校は生徒指導でいろいろと苦しんだ時期があった。落ち着いた環境づくりの一環として朝読書に取り組んだ。結果として生徒は落ち着きを取り戻し、静かな環境の中で1時間目の授業に入ることができるようになった。

朝読書は生徒指導であり、人間教育であることを学んだ一人である。